

「腐敗一掃」と「言論統制強化」の両立の意味を考える

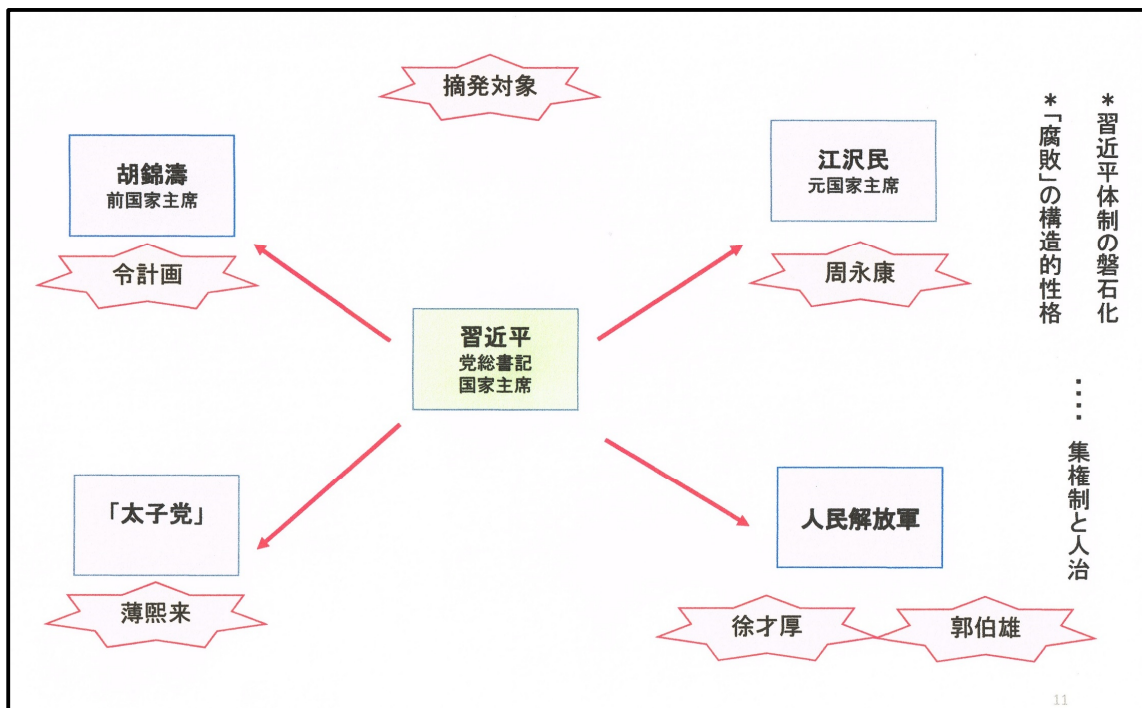
教養講座質問（「政治経済」6月）に答えて

山本恒人

1. 腐敗一掃は「大トラ退治」で完成するか

統治機構の腐敗を許さない習近平さん

郭伯雄・前中央軍事委員会副主席の党籍剥奪処分と軍事検察当局送致（もうひとりの副主席徐才厚は病死不起訴処分）と令計画・党統一戦線工作部部長（元党中央弁公庁主任）の党籍剥奪処分と司法当局送致が正式に決まりました。いずれも収賄と規律違反が問われたものです。令一族の腐敗の広がりも深刻なようで、実弟の令完成はすでに米国に重大機密をもって逃亡、その亡命要請をめくり、米中間で駆け引きがあるといわれています。この二人の「大トラ」の摘発を以て、「反腐敗」の取り組みはヤマ場を越え、夏恒例の北戴河会議後は経済・軍改革に踏み出すという観測もあるようです。いずれにしても、習近平さんのリーダーシップと行動力は並外れたものであることは疑いを入れません。



腐敗は構造的、人心失えば共産党滅ぶ

習近平さんは本格的な汚職腐敗一掃の号令を発した2012年に、「民衆が深く恨み、徹底的に嫌うこと」として、「形式主義、官僚主義、享楽主義、贅沢三昧」の4つを挙げて、「人心失えば共産党滅ぶ」と強調し、有名な「ハエもトラも一緒に叩く」という表現で、その決意を披露しました。その摘発は、江沢民氏をバックにもつ前チャイナ9の周永康、胡錦濤氏配下の令計画、いわゆる太子党の重慶市党書記薄熙来、そして中央軍事委員会の副主

席郭伯雄と徐才厚と、全方位に及んでいます。それゆえ、私は、汚職と腐敗の深刻さと広がり、それが偶発的なものと言うよりは構造的なものであると考えているのです。習近平さんの摘発路線は「構造的腐敗」を抜本的に一扫できるのかどうか、Hさんの質問にある問題提起はよく考えてみる価値があります（ご質問内容は本文末尾に）。

2. 反腐敗運動の進展 庶民は絶望から希望へ

庶民派作家の観察 反腐敗運動は庶民の信頼を取り戻した

ところで、この問題を考える上で興味深い人物を『朝日新聞』の「インタビュー『中国民衆の思い』」¹が取り上げています。中国の人気作家・梁曉声氏。北京語言大学教授で、自らの体験も含め文革期の下放知識青年の問題を中心に作品化し、「老百姓（庶民）派」とも言われる作家です。2014年に『我相信中国的未来（私は中国の未来を信じる）』というエッセイ集を発表しました。

梁曉声氏は次のように語っています。〔「実は3年前まで、私も中国の未来を信じていませんでした」。それは「腐敗問題があまりに多く、あまりに大きく、ひどすぎたからです」。梁曉声氏が描写する腐敗状況。「官僚や企業幹部は広い執務室で働き、豪奢な邸宅に住む。景色のよいところで開かれる会議に愛人と一緒に参加し、ぜいたくに飲み食いし、お土産まで買う。大小の権利を持つものはみな腐敗し、賄賂を要求、人々の不満は限界に達していた」。最も危険なのは、腐敗の蔓延が各地で抗議運動を引き起こしていたことです。行き着く先は造反と革命、混乱しかない。腐敗が老百姓の心を浸食し始め、あらゆる中国人が国に未来などあるわけがないと感じ始めていた」。腐敗の蔓延に老百姓同様、梁曉声氏も国の未来を信じていませんでした。しかし、習近平氏が政権につき徹底的な反腐敗運動を進めるに及んで、「人々は『中国にも未来はある』と口にし始め」、「私も未来を信じ始めました」という〕。

汚職と腐敗の蔓延、庶民の怒りと中国の未来への絶望、それが各地で抗議運動を引き起こすほどの事態になっていたこと、習近平さんが始めた反腐敗運動の徹底ぶりと民衆の希望の再生、梁曉声氏は中国の内部からこのように活写しているのです。続いて、梁曉声氏は「習近平さんはなぜ反腐敗運動を始めたのか」、それにもかかわらず、他方で「なぜ言論統制を強化しているのか、社会改革には批判は必要なのでは」という質問に対して興味深い見解を述べています。

「紅二代」と「老百姓」（庶民）

第1の見解；〔党幹部の子弟である「太子党」は、「紅二代」（革命に身を投じ人々の子弟）と「官二代」（建国後に出世した官僚の子弟）とに分かれる。「紅二代」は国への責任感が重く、その責任感は「党を救い、国を救い、人民の為に」の三点に集約され、彼らは「ここは我々の国家だと考え、危機感を抱いている」。習近平氏こそ「紅二代」であり、その責任感を共有している。この「紅二代」の強い支持と「老百姓」の支持があるから反腐敗運動を進めることができた〕。

第2の見解；これは二段からなります。〔「知識人は言論の自由が欲しいと言う。外国と同じ自由を与え、新聞などで批判を始めたら改革も発展も止まる」。中国は「一放就乱、一乱就収（緩めれると乱れ、乱れると引き締める）」であって、欧米や日本の人はこのような特質をよく理解していない〕。この議論は天安門事件の際に（1989年）鄧小平さんもよくしていました。〔老百姓は「民主なんて関係ない、財布が大きくなればそれでいい」と思っている。すなわち「羊腿（財布）と民主の問題」。「国がやるべきことは毎年毎年彼らの財布を大きくすること」。農村の貧しさを知る中で、私は中国とは何かを理解したのです。〕

文革世代として農村に下放され辛酸を味わい尽くしつつも、そこで農村の実態を知り、知識人でありながら、そこに自分の位置を見定めて作品を作り、社会的発言を続けている梁曉声氏の言葉には説得力があり、中国を見つめる貴重な視点に学ぶことが大切だと思います。しかし、敢えてその言説にある矛盾や問題点を掘り下げても、中国の人々との交流を深める上で意味のあることだと考えています。

3. 反腐敗運動の原動力とは何か

反腐敗運動の原動力は庶民にあり

先ず、梁曉声氏の第1の見解で違和感を持つのは、「紅二代」（革命に身を投じた人々の子弟）に対する過大評価です。反腐敗運動で真っ先に摘発された薄熙来は習近平さん同様「紅二代」中の「紅二代」（革命の元老・薄一波氏の子息）です。「紅二代」が「党を救い、国を救い、人民の為に」の責任感、使命感を無条件に持っていると思なすのは、実際の上でも、論理的にも幻想にすぎません。文化大革命中、「親が赤ければ子も赤いのか」と根底的問いかけを行い、「反革命分子」として処刑された遇羅克による「出身血統主義批判」²で完膚なきまでに批判された発想です。

より重要なことは、習近平さんに「人心失えば共産党滅ぶ」とまで認識させた人心の存在です。腐敗の蔓延によって、「未来を信じることができず」、「不満は限界に達し」、「各地で抗議運動を引き起こす」ような、人心、「老百姓」の心と行動こそが習近平さんを動かしたのです。そう認識できたのは「紅二代」であったからというよりは、国家指導者として責任感をもって現実を見つめれば、徹底した反腐敗を進める以外に国家の未来はないという状況に置かれていたのです。

中国の伝統思想「放伐論」の反映

そもそも「人心失えば共産党滅ぶ」という発想は中国の伝統思想の一角を反映したものです。原始儒教にあっては、「放伐論」すなわち「君主は天より命を受けて広大な国土と民衆とを依託されたのだから、心をこめて民衆を穏やかに安んじさせ教育しなければならない」、「君主が天への義務を怠り、私利にのみ走れば、放伐（追放あるいは討伐）の処罰を受けて当然である」といういわば革命的思想が含まれていましたが、まさに古来政権を担

うものの責任を思想化したものといえます³。

その意味では、習近平さんに「天命」を突きつけたのは「老百姓」なのであって、国家指導者として習近平さんはそれを受け止め、私利に走る共産党大小幹部に鉄槌を下しつつあるというべきでしょう。「紅二代」、「官二代」、あるいは「成り上がり」かどうかという問題は副次的な問題にすぎません。

4．民主は社会主義の基礎

根強い大衆不信

腐敗の蔓延に対して、「未来を信じることができず」、「不満が限界に」達して、「各地で抗議運動を引き起こす」ことによって習近平さんを突き動かした老百姓と、「『民主なんて関係ない、財布が大きくなればそれでいい』と思っている」老百姓と、梁曉声氏の中ではどのように老百姓の実像が結ばれているのでしょうか。梁曉声氏の「第二の見解」に含まれる矛盾点です。「緩めると乱れ、乱れると引き締める」という歴代共産党指導者に共通する観点も、梁曉声氏は「第二の見解」で共有していますが、これは社会の主体は誰かという原点が抜け落ちた発想ではないでしょうか。上に立つ英明な指導者あるいは指導者集団と無知蒙昧な大衆という構図です。「しっかりと握っていなければこぼれ落ちてしまう砂」、これも鄧小平さんの言葉ではなかったでしょうか。あれほど「大衆路線」を強調する中国共産党の深部での大衆不信と考えざるをえません。

共産党と国民の間の相互交通制度化の重要性

しかし、梁曉声氏はこうも述べています。「老百姓の希望を制度化すること」、「老百姓の素質を高めること」が大切で、老百姓が「国家の状態と方向を決めるのです」。この指摘は全く正しい。社会の主体は老百姓、庶民、国民なのです。このことと中国共産党との関係はどうなっているのでしょうか。ひとことで言えば、共産党は社会の主体である国民を指導する存在です。これは中国憲法に明記されています。中国憲法には「新民主主義革命と社会主義の事業の達成」という国家目的とその達成のための担い手に対する「共産党の指導性」が規定されています。一応、「老百姓」が決めるべき「国家の状態と方向」と憲法が規定する「新民主主義革命と社会主義の事業の達成」との間には矛盾がなく、「国の安定と国民の幸福」という内容で一致しているとしましょう。それでも日々変化する国内外の状況は「国の安定と国民の幸福」の実現をめぐる国民の相互間に、共産党の内部に、国民と共産党との間に、さまざまな利害の対立や、軋轢を生むことがあるでしょう。このような時、共産党の指導性が意味を持ち、その指導性の優位性を憲法が保証しているのです。重要なことはその指導性が無謬ではありえないことです。国民によって指導性を託された共産党が指導の内容と方向性で誤りに陥ることを避ける唯一の方法は、社会の主体たる国民のチェックを受けることです。共産党と国民との対話と言ってもいいでしょう。それが民主主義なのです。単純に民主主義というのに抵抗があるのであれば、「社会主義的民主主義」と言っても良いでしょう。「人民代表大会」や「政治協商会議」はそのチェックと対話

の制度としてはなお不十分であり、「老百姓の希望を制度化すること」が求められているのです。反腐敗運動の過程はそのことを物語っているのだと思います。

知識人は相互交通を支える存在

知識人についても信頼が必要です。中国共産党の憲法的枠組みそのものに疑義を呈し、「体制批判」に及ぶ知識人もいますが、ほとんどの知識人は共産党の存在意義とその国家的指導性を認めたとうえで、その問題点や指導性のレベルに批判を投げかけているのです。腐敗の裏側には権力の乱用があることは習近平さんも認めています。これに対する批判や提言をも「体制批判」として警戒し、言論統制によって知識人の批判的精神を封殺するというのは、なんとも勿体ない話です。たとえば、多くの弁護士や教員たちが、「抗議運動」をする「老百姓」によりそって、実力行使だけが方法ではないことを説き、法律的手段をともに学び、その実行を手助けするというのは、まさに「老百姓の素質を高めること」に繋がっているのです。これは共産党の統治の土台により豊かな可能性をもたらす行為なのです。知識人も社会の主体たる国民の一員であり、その言論を統制することは国富を棄損することになりかねません。

注記

1. 『朝日新聞』2015年8月7日。
2. 遇羅克の「出身血統主義」批判を日本で初めて取り上げたのは、加々美光行訳編『資料 中国文化大革命 出身血統主義をめぐる論争』りくえつ社、1980年。日本における文化大革命に対する科学的研究の嚆矢である。
3. 市井三郎（訳と改題）「羅世烈著『封建専制主義は孔孟の道ではない』」『文化大革命と現代中国（資料と改題）』アジア経済研究所、1982年、p.50,51。

（2015年9月7日）

*教養講座〔政治経済。6月21日〕質問 汚職と腐敗について

「H氏；習近平さんは相当な決意で汚職腐敗に取り組んでいますが、中国では三権分立が確立されず、すべての上に党が君臨するという体制を考えますと、共産党の腐敗体質を克服するという事は、至難のことだと思えるのですが、いかがか。現状では、習さん一族にもキナ臭い風評があるようで、巷間言われるように権力闘争の過程なのかと考えてしまおう。」